

話題の人

●インタビュー



こいずみのりひろ
小泉徳宏
(映画監督・塾員)

撮影監督として世界を舞台に活躍

撮影監督

おのやま かなめ
小野山 要さん

年)で撮影監督を務めるなど、ワールドワイドにご活躍中ですね。

小野山 ありがとうございます。

——小野山さんは私と同じ、慶應のシネマ研究会のご出身ですが、映画にはいつ頃から興味を?

小野山 本格的に興味を持ったのは大学に入ってからですね。大学に入る前、僕は大阪と岡山の郊外で暮らしていたのですが、当時はインターネットの配信もまだなく、映画に触れる機会がありませんでした。

慶應に入學し、上京して初めて見たのはフランス映画、ギャスパール・ノエ監督の『カノン』(一九九八年)です。

——あれを最初に(笑)。すごい映画を見ましたね。

小野山 『カノン』を見て衝撃を受けて。実は見に行った時、偶然監督が劇場にいられていて、トークショーがあったんです。内容はわからなかったのですが、そこで初めてフランス語にも触れて、それがきっかけでフランスに興味を持つようになりました。

——『カノン』がきっかけで、フランス映画に興味を持ち、シネマ研究会に入ったんですね。

小野山 ただ、興味はありましたが、自分で映画を撮りたい、とはまだ思っていなかったんです。シネマ研究会で



塾員(2004年文)。代表作に『Top Boy』など。卒業後、渡仏しバリエーション豊かに活動。フランスの映像業界で多様性を支持する団体「Divé+」を設立。

▼撮影監督を志すまで

——現在、Netflixの『Top Boy』シリーズ(二〇二二〜二〇二三年)や、映画『Inshallah A Boy』(二〇二二)

も映画を撮る、というより好きな映画について友人たちと話す時間の方が多かったですね。

実は卒業後、大学院に進むことが決まっていたのですが、色々と考えた結果、やはり映画の仕事に携わりたいと思って、一度、日本を出ることにしました。

——それで、フランスへ？

小野山 はい。フランス行きを決めた後、シネマ研究会の先輩の水野さんに「映画をやるって決めたのなら、これからは寝ても覚めても映画のことを考えるようにするべき」と言われ、それから毎日映画を見るようになりました。

▼フランスでの挑戦

——フランスでは、どのように映画の勉強をしたのですか？

小野山 国立の有名な映画学校を受験し、残念ながらそこには受からなかったのですが、「ESRA」という私立の映画学校に入ることができました。

ただ、入ってから悩んでいた。映

画に携わりたい、といっても自分のやりたいことがわからないし、何をすればいいのかもわからない。それで入学後、先輩である小泉さんに会いに行っただけです。

——覚えています。写真の話をしましたよね。

小野山 はい。会って色々話を聞いてもらって。その時に、カメラの話題になったんです。

当時はまだ映画学校でもフィルムで撮影をしていたのですが、一六ミリカメラは誰も触りたがらなかったんです。それで余っていたカメラを使ってみたら面白かった、という話をしたら、小泉さんが学生時代に僕がカメラを持って写真を撮っていたことを思い出して、「撮影監督を目指したら？」と。

「撮影監督は、すごく大切な仕事で、監督と二人でベアになってやっていくんだ。小野山はそのポジションを目指してもいいんじゃないか」と言っていた。それで僕も撮影監督になる決心をしました。

▼見習いからカメラマンへ

——映画学校を卒業後、すぐに撮影監督として仕事ができただけですか？

小野山 いえ、最初は見習いとして現場に入りました。ただ、長編の作品に七本ぐらい見習いとして携わったのですが、助手に上がれなかったんです。その一方で、僕より明らかに技術力も低いような、若い子たちがどんどん助手として採用されていく。そんな理不尽な状況に気付き、最終的に独立してカメラマンになる道を選びました。

その頃、映画業界ではフィルム撮影からデジタル撮影に移行する大きな転換期でした。学校にいた時から、僕はフィルムに触れていましたが、デジタル撮影にも携わっていたんです。すると、フィルムもデジタルもこなせる人間ということで、幸いにも多くの仕事をいただけました。

——最初はどのようなお仕事だったのですか？

小野山 二〇〇七年、僕の卒業と同じ

時期に、YouTubeの普及とiPhoneの登場による3G回線を使用した携帯端末での動画視聴の拡大など、技術革新が相次ぎ、映像をめぐる環境は大きな転換点を迎えていました。その流れを受けて、予算規模の小さい広告を毎日撮影していました。

映画を撮りたい、という思いはあったのですが、なかなか機会がなくて、どうにかこの状況を打ち破りたいと思い、ロサンゼルスに行っただんです。

——何かあてがあったわけでもなく？

小野山 とりあえず行つて、色々な人に会ったんです。その中には、今契約を結んでいる、アメリカの映像業界のエージェントもいて、初めて会った時に、アドバイスをもらっただんです。

いきなりロサンゼルスに来たところで仕事は取れない。だからロンドンに行きなさい、と。そこでうまくいけば絶対に我々の所に名前が届くからと。

——意外ですね。ロンドンでの活躍がアメリカの活動に繋がるとは。

小野山 それで二〇一七年に初めてロ

ンドンに行つた時、向こうのカメラマンに会つたのですが、その時に「インスタグラム、ある？」と聞かれたんです。どういふことだと思つて、彼らのインスタグラムを見たら、もうポートフォリオみたいになっていて。だからその日の夜、自分のカプチーノやらネコの写真を全部撮つて、急いでインスタグラムをプロ仕様しました。

それをロンドンに行くたびに見せていたのですが、そんな中、やつと今のイギリスでの仕事を担当してくれてやるエージェントに出会えたんです。

そのエージェントから、「ヘンリー・スコフィールドという監督が新しいカメラマンを探してるから、やつてみるか」と言われて、「やります」と即答しました。彼は当時、イギリスでも上り調子の監督で、イギリスの主要なアーティストのミュージックビデオも担当していました。

お蔭で、彼が監督したミュージックビデオを全部撮らせてもらえて、しかもその作品がミュージックビデオアワ

ードにもノミネートされたんです。そこで初めて、イギリスで僕の名前を認知してもらえました。

▼イギリスとフランスにおける、多様性への取り組み方の違い

——成功への道を歩み始めたわけですね。

小野山 ただ、その時に思ったのが、イギリスはなんでこんなにうまくいくんだらうと。フランスには憧れもあつて、準備や、現地に溶け込むための努力を色々していたのに、うまくいかなかった。

一方、イギリスには個人的な思い入れがあまりなかったのに、周りのリアクションが全然違う。フランスで感じていた、何を言つても先に進めない感覚が、イギリスにはなかったんです。当時はその理由がわからなくて。

それからまもなくして、BLM（ブラック・ライブズ・マター）運動が起つたのですが、その時、イギリスでは周りにいた黒人の撮影監督や監督、ア

ーティストのみならず、他の白人もBLMに関してすごく真剣に取り組んでいたんです。映像業界から、今度こそ差別をなくすんだと言って。そのことにすごく感動しました。

もちろん、フランスでも社会的な動きはありました。でも映像業界に関していうと、イギリスの方が反応が大きかった。現にフランスでは有名な監督もアーティストも、それこそ黒人の俳優も、誰一人BLMについて発言しなかったんです。

そこでようやく、自分がフランスでチャンスをもたらえなかったのは、「そこにいない存在」（インビジブル・マイノリティ）として扱われていたからなのだと理解したんです。

——いわゆる「ガラスの天井」があった。

小野山 アジア人だから差別された、という感覚はなかったのですが、まるでそこにはいないように扱われている。だからフランスではチャンスを与えられることもなかったんだと、ようやく気が付きました。

▼Netflixでの出会いと発見

——Netflixの『Top Boy』シリーズを撮られたのはその後ですか？

小野山 そうですね。この『Top Boy』がすごく大きな経験で、初めてプロダクションに行ったら、本当に様々な人たちがいたんです。国籍も多様で、年齢層も性別も様々。トランスジェンダーの人もいました。

そこで彼らから、Netflixでは多様性を支持することを積極的に行っていて、『Top Boy』はその中でもすごく大切な作品だから、監督や撮影監督には多様性を擁護するための予算が付けてある。だからメンター（指導者）となつて若い見習いを取ってくれたら、その子たちに支払うお金も用意していると、言ってくれたんです。

——素晴らしい。

小野山 そこで、インスタグラムを使って見習いの募集をかけたなら、その投稿がものすごく拡散されて。四八時間でメールが千通も届いたんです。その

内の百通ぐらいが、自分たちの現状について書かれた内容で、読んでいてもすごく胸を打たれたんです。

環境のせいで、映画学校に行けないが、自主制作で作品を作っている、という人もいれば、映画だけでは食べていけないから仕事をしながら映画を撮っている、という人もいて。どの人を選ぶのか、ものすごく悩みました。

——その中で一人しか選ばないとなると、選ぶのも大変ですね。

小野山 そうなんです。それで悩んだ結果、選んだのが黒人系のトランスジェンダーの子でした。

ものすごくやる気がある子で、その仕事を機に、今までお金をもらえるから嫌々やっていたバーの仕事を辞めることができたんです。さらに作品作りに関わる中で、時々簡単なシーンを撮らせてあげることもできました。

その子から、LGBT問題についても色々と教えてもらいました。若い子なのに一生懸命教えてくれて、自分にとっても学ぶことが多かったなと、

『Top Boy』の現場で痛感しました。

▲ Dive+を立ち上げて

小野山 そうした体験を経たこともあって、この取り組みを業界のみんながやれば、イギリスならば、もしかしたら他の人がチャンスをどこかで与えているかもしれないと思っただんです。

一方で、フランスはどうなんだろうと。もしあのままフランスに残っていたら、おそらく仕事を続けることはできなかつたと思うんです。現在も、やる気があつて、映画が好きなんでも、辞めざるを得ない状況がある。

なんでこんなに目を輝かせた才能が消えていかなければいけないのか。いたたまれなくなつて『Top Boy』で経験したことを、フランスに帰つて友達に話し始めたんです。

すると、返つてきた返事が意外で、イギリスはフランスより人種差別が激しいんだと。そういつたことをやること自体が、生物学的には人種というのは本来ないのに、あたかもあるよう

にして、ある一定の人種を優遇しているのは差別だと言っんです。

——むしろ逆差別ではないかと。

小野山 それで、みんなが「フランスには差別で苦しんでいる人はいない」と言うのであれば、本当にいないのか探してみようと思ひ、業界中を探しました。すると自分のように、差別感を感じている、マイノリティの人々が大勢いたんです。

彼らはBLMとか、色々なテーマに興味を持つていて、話すたびに学ぶことが多かつたんです。それが面白くて、最初は一对一会つていたのが、気付いたらカフェに入らないぐらいの人数になつていました。

そんな時、この集まりを「団体の形にしよう」と言われて、それで作られたのが Dive+（ディヴェ・プリウス）ですね。

——この名前はフランス語でダイバーシティを意味するdiversitéと、+（プラス）を掛け合わせたものになるのでしょうか？

小野山 その通りです。最初は『8

divers」といつて「ダイバーシティのみなさん」という意味で表記していたのですが、ある時トランスジェンダーの人たちから、フランスのフェミニズムが危機的な状況だという話を聞いて。

フェミニズムは本来、社会的なあらゆる差別を一切やめましよう、というムーブメントなのに、自分たちの権利を主張しながら、他の人たちを差別する、という人もフェミニストと自称している。その影響から、女性問題を扱っている団体に入つても居場所、いわゆるセーフプレイスがないと。だから、そんな場所があれば嬉しい、と言われたんです。

そこで、団体名に「+」と付け、全ての人たちを包摂しようということになり、Dive+という名前になつたんです。

——具体的に、Dive+はどのような活動を行っているのでしょうか。

小野山 僕が考えているのはアメリカ、イギリス型のメンタリシップ制度を広めたいということです。差別を感じるマイノリティに対して、映像業界

の中でのセーフプレイスになればと
考えています。

それから、先ほども言ったように、
そこに「いない」ことになっている人
をみんなの目に届くようにしてあげた
い。例えばアラブ系の監督がドキュメ
ンタリーを撮った、といったことがあ
れば、インスタグラムでシェアするよ
う、心掛けています。

——見えていない人たちの存在を見える
ようにすると。

小野山 僕は、差別のない制作環境で、
差別を助長しないような作品をみんな
で撮っていききたい。それをフランスで
も実現したいんです。

僕はフランスを第二のふるさとと思
っています。素晴らしい国だなと思
うし、素晴らしい人にもたくさん会っ
てきました。ただ、どうしても素晴ら
しいからこそ見落としがちというか、
盲目的になってしまいう側面があると思
うんです。そういう人には変わってほ
しい。変わって、保守的な考えに対し
て「ノー」と一緒に言ってくれる人を

増やしていければ、そう思っています。

▼今後の活動について

——それでは最後に、今後の活動につい
てお聞かせください。

小野山 今はアメリカのドラマも撮る
ようになって、アメリカの Amazon
プライムの新作の『Butterfly』で
も撮影監督を務めています。今年は M
LB ジャパンさんの CM も担当させて
いただきました。ぜひ、見ていただい
けると嬉しいです。

——今後、日本でお仕事をされる可能性
もあるのでしょうか？

小野山 お話をいただければ、可能性
は充分にあると思います。

ただ、以前日本で仕事をした際に、
労働環境の違いには驚きました。僕ら
は普段、国際ルールに従っているため、
一日の撮影時間は約一二時間、それか
ら次の撮影を始めるには一一時間、間
を空けないといけないんです。

でも、日本では撮影時間が一四時間、
時にはそれを超過することもある。休

息時間という概念もないため、超過し
ても、普通に次の日の同じ時間から撮
影を始める。時には、ほとんど寝ない
で撮影をすることもあったと聞きます。

——残念ながら、ありますね。

小野山 今後、海外のプロダクション
が進出してきて、日本で撮影をするこ
となった際、日本人のスタッフを国際ル
ールで雇う、といったケースも出てく
ると思います。

そうなると、同じ撮影監督を国内の
プロダクションが雇おうとしても、待
遇面の差から、皆、海外のプロダクシ
ョンを選んでしまうのではないかと。
それはもったいないですよ。

日本にも若くて優秀な人材が大勢い
ると思います。ぜひその人たちが才能
を存分に発揮できる環境を作ってほし
いです。

——いつかそんな日がくることを願っ
ています。本日はどうもありがとうございます。
ました。

(二〇二五年七月十五日、三田キャンパ
スにて収録)